

Title	志向性・知覚・指標性：サールの「内在主義」について
Author	美濃, 正
Citation	人文研究. 45 卷 3 号, p.205-224.
Issue Date	1993
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	佐藤全弘教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部紀要
第45巻 第3分冊 1993年 87頁～106頁

志向性・知覚・指標性 ——サールの「内在主義」について

美 濃 正

ジョン・サールは、言語行為論 speech act theory の理論家の一人として日本においても以前からよく知られているが、その後、彼の思索はいわゆる心の哲学 philosophy of mind の方向へと発展させられてきた。⁽¹⁾そして、言語哲学と心の哲学の両分野わたる、サールの最初の体系的著述として出版されたのが、本稿の検討対象である『志向性』(J. Searle, *Intentionality*, Cambridge University Press, 1983)である。

『志向性』においてサールが主張しようとした哲学的に重要なテーゼは、次の三つのものであると考えられる。すなわち、(1)心的状態こそ本来的に志向的なものであり、言語表現の志向性は心的状態の志向性に依存する。つまり「言語の哲学は心の哲学の一部門にはかならない」(p.vii; cf. pp.26-29 and ch.6)⁽²⁾というテーゼ⁽³⁾。(2)志向的状态が外的世界の対象(ないしは事態)と関わり合う場合にどの対象と関わり合うかは、内的な志向的内容 Intentional content によって決定されるという「内在主義 internalism」のテーゼ (cf. esp. pp.198f.; p.222)⁽⁴⁾。そして、(3)志向性を含めて主観的な心的性質をわれわれがもつということは、われわれの脳に関する生物学的ないし物理的事実の一部にすぎないという、物理一元論ないし「生物学的自然主義」(p.230)のテーゼ (cf. p.ix; ch.10)である。⁽⁵⁾これらのテーゼは、現今の英米哲学において主流を占める言語や心の理論と真っ向から対立し合う点を含んでおり、それが『志向性』をきわめて独自の、かつ興味深い書物にしている。

本稿は、『志向性』が含む以上三つの主要テーゼのうち、もっぱら第二の「内在主義」のテーゼのみを検討対象とする。より詳しく言えば、サールの「内在主義」が維持しうる主張であるかどうかを検討することを目的とする

が、そのために次のような順序で議論を進めていきたい。まず第一節から第三節にかけて、サールの志向性の理論の概要とこの理論に基づいて彼がどのように内在主義を擁護しようとしているかを確認する。次に第四節と第五節において、サールの内在主義擁護論が成功しているかどうかを検討する。その際、検討の焦点としてとりあげたいのは、知覚経験の志向的内容、および知覚経験と指標的発話の自己指示性という二つの事柄である。以上の検討に基づき「内在主義」のテーゼが維持し難いことを確認し、最後に、そのことがサールの志向性の理論に対してもつ意味について、簡単な考察を試みたい。

1. 志向性の理論の枠組み

まず、本稿の目的に必要な範囲で、サールの志向性の理論を概観することにしてしよう。彼はほぼ従来の哲学の伝統に従って、志向性とは、心の多くの状態や出来事（以下簡便のため、「状態」という語をその外延に出来事をも含む広い意味で用いることにする）がもつ、世界の対象や事態「に向けられている being directed at」ないしはそれら「についてのものである being about」という性質のことである、と理解する（cf. p.1）。問題は、「に向けられている」とか「についてのものである」といった比喩的な言い回しに、どのような実質的意味を与えるかである。サールのとる方針は、言語行為の理論がすでに確立されていると前提し、言語行為の諸類型と志向的状态の諸類型との間の類似を示すことによって、志向性の理論の実質的内容を与えてゆくという方針である。

たとえば、誰かによって行われる「あなたは部屋を出てゆくであろう」という発話すなわち言語行為は、「あなたが部屋を出てゆくこと」という命題内容 propositional content と「予言」という発話内的力 illocutionary force という二つの要素から成っていると、言語行為の理論は分析する。しかし同様に、「あなたは部屋を出てゆくであろう」と信じる志向的状态は、「あなたが部屋を出てゆくこと」という表象内容 representative content または志向的内容 Intentional content と「信念」という心理的様態 psychological mode という要素をもつとみなすことができるであろう（cf. pp.5f.）。

同じように言語行為の理論を発見的手段とすることによって、多くの重要な志向的状态に関して⁽⁶⁾、適合方向 direction of fit の概念と充足条件 conditions of satisfaction の概念が適用可能であることが示される、とサー

ルは主張する。たとえば、私のある信念が偽であることが分かったとすれば、私はこの信念を訂正するほかはないであろう。したがって、信念という志向的状态の適合方向は、「心から世界へ」という方向であると言われる。逆に、意図や欲求が実現されるためにはそれらにふさわしい事態が世界の側に生じなければならないから、それらの適合方向は「世界から心へ」という方向である (cf. pp.7f.)。

適合方向の概念は、志向的状态が真となったり、実現されたり、実行されたりすること、つまり一般的に言えば志向的状态の充足 *satisfaction* の概念を前提していることは明らかである。そして、ある志向的状态がまさにその種の志向的状态として他の志向的状态から区別されるのは、それが充足されるためにはどのような事態が成り立たなければならないかということ、つまりそれがどのような充足条件をもつかということ (およびその心理的様態) による、と行うことができるであろう。このような意味での充足条件 (つまり「(与えられた志向的状态が充足されるためには) かくかくしかじかの事態が成り立たなければならないこと」。これをサールは「要求 *requirement*」としての充足条件と呼ぶ (p.13)) は、したがって、各々の志向的状态にとって「内在的 *internal*」な要素とみなされなければならない。(これに対して、志向的状态が実際に充足される場合に、これを充足する世界における事態そのものは、「要求されるもの *thing required*」としての充足条件と呼ばれる (*ibid.*。)) それゆえサールは、「要求」としての充足条件は、同じく志向的状态の内在的要素である志向的内容によって決定されると主張する⁽⁷⁾ (cf. pp.10-13)。

今一つサール理論において注意すべきことは、あらゆる志向的状态が何らかのアスペクト *aspect* のもとにあると考えられていることである。たとえば「雨が降っている」という信念は、まさしく「雨が降っている」というアスペクトのもとにあるのであり、たとえ(「要求されるもの」としての)充足条件が同じでも、「水滴が空から落ちている」というアスペクトのもとにある信念とは区別される。

以上が、サールの志向性理論の核心部分である。これに加えて、いくつかの重要な概念が付加的に導入され、彼の理論を複雑化させてゆくが、これらについてはすぐ後でサールによる知覚経験の分析を見る際に説明することにする。サールの核心的なアイデアは、したがって次のようになるだろう。すなわち、ある状態が志向的状态であるとは、それが一定の志向的内容(特に命題

内容)と心理的様態とをもち、さらに多くの重要なケースにおいては、前者によって決定される(「要求」としての)充足条件と後者によって決定される適合方向とをもち、ということにはほかならない。

サールの理論の主要な特徴を確認しておこう。第一の特徴は、志向性とは何か「に向けられている」という性質であると最初に言われたが、では志向的状态は何に向けられているのかという問いに対して次のように答えられる点に認めることができる。すなわちその答えは、本来の意味では、「要求されるもの」としての充足条件(の一部)、つまり現実世界におけるある事態「に向けられている」というものである。しかしもちろん、多くの志向的状态は実際に充足されるわけではない(偽なる信念、実現されない意図や欲求は数多く存在する)。したがって、サールによれば、本来の意味では何のものにも「向けられてい」ない志向的状态が多数存在することになる。にもかかわらず、それらが志向的内容と心理的様態とをもちかぎりは、志向的状态であることにはかわりはないのである。つまりサールは、多くの哲学者が想定した、心と世界とをつなぐ中間的な観念的存在者としての「志向的对象」の存在は認めない。彼の言う「志向的对象」とは、現実の世界のあれこれの事態にはほかならない(cf. pp.16f.)。

第二の特徴は、サールによる志向性の分析は、志向的状态が実は志向的状态ではないもの(たとえば脳の物理的状态)にはほかならないことを示そうとする「還元的 reductive」分析ではなく、むしろそれをまさに志向的状态としてよりよく理解するための概念的枠組みを作り出そうとする試みにほかならないということである。彼自身の言葉で言えば、「志向的状态の論理的性質 logical properties」の解明の試みであって、その「存在論的身分 ontological status」の探求ではない。言い換えれば、サールの分析に現れる、志向的内容、心理的様態、充足条件、適合方向、アスペクトといった諸概念は、志向性ないし志向的状态の概念そのものと同じレベルの概念であり、したがって彼の分析はその意味で志向的な概念による志向性の分析にすぎないのである(cf. pp.14-16; p.79)。

さて、サールは、以上のような分析をその核心部分とする、志向性の一般理論を用いて、知覚 perception、行為 action、さらには言語行為といった諸現象に含まれる志向性のあり方を明らかにしてゆこうとするのであるが、彼のこのような試みの全体を概観することは本稿においてはできないし、また必要でもないであろう。ただ、本稿の検討対象である彼の内在主義の成否

という問題に深く関わる点があるので、サールによる知覚の分析を次節において簡単に見ておくことにする。

2. 知覚の志向性の分析

知覚 perception が成立するための条件、言い換えれば、「x が y を知覚する」という形の文の真理条件はどのようなものであろうか。『志向性』の第二章においてサールは、その第一の条件は知覚主体 x が知覚経験 perceptual experience (もちろん知覚の様態に応じて視覚的、聴覚的、触覚的など様々の種類がありうるが) をもつことであると主張する (cf. pp.38f.)。そして知覚経験とは、彼によれば「意識的な心的出来事」であり、一定の「現象的性質 phenomenal properties」⁽⁸⁾ をもつものである (cf. p.45)。(同じく「心から世界へ」の適合方向をもつ信念という志向的状态から知覚経験が区別されるのは、この点においてである。) このような知覚経験、より正確にはそこに含まれる現象的性質こそ知覚における志向性の担い手である。

それでは知覚経験が本物 veridical の知覚経験であるための条件、つまりはその充足条件はどのようなものであろうか。たとえば、知覚主体が「そこに一台の黄色いステーションワゴンがある」と報告するような(視覚的)経験の場合、実際に彼の目の前に一台の黄色いステーションワゴンが存在することが第一の条件であろう。しかしそればかりでなく、サールが正しく指摘するように (pp.47f.)、知覚の対象である当のこの事態が適切な仕方で当の知覚経験を引き起こす原因となっているということも、知覚経験が本物の経験であるための不可欠の条件であろう。それゆえ、知覚の成立の条件とは、上に述べたような知覚経験を主体がもち、かつこの経験の充足条件が実際に充足されることである、ということになる (cf. pp.61-62)。

しかし、サールにとって最も重要なことは、以上のような知覚経験の充足条件がその志向的内容によって決定されている(これこそ「内在主義」の主張にほかならない)ということである。したがって彼によれば、知覚経験の志向的内容を(上の例に即して)言語的に示せば、次のように表されることになる (cf. p.48 et passim)。すなわち、

(a) 視覚経験 (目の前に一台の黄色いステーションワゴンがあり、かつまさにその事態がこの視覚経験を引き起こしている)

といった仕方で表される。注目すべきは、このような分析によれば、知覚経験の志向的内容には当の知覚経験自体への指示が含まれることになる、とい

うことである。これをサールは知覚経験の「(因果的) 自己指示性 (causal) self-referentiality」と呼ぶ。これは前節での概観には現れなかった、サールの志向性理論の新しい構成要素である⁽⁹⁾。

この「自己指示性」の概念がわれわれにとって興味深いのは、単にこの概念がサールによる知覚の志向性の分析を独特のものにしているという理由だけによるのではない。実はこの概念こそ、知覚経験に関してのみならず、他の種類の志向的状态に関しても、サールによる内在主義の主張を成り立たせるための一つの鍵概念になっているのである。この概念を主要な武器として、彼は特に1970年代以降数多く提出されてきた内在主義批判の諸議論に対して論駁の陣を張る⁽¹⁰⁾。次節では、その一例として、パットナムの内在主義批判に対するサールの論駁の試みを見ておくことにしたい。

3. サールによる内在主義の擁護

パットナムによる内在主義批判の諸議論のなかで最も有名でかつ有力なもの、次のような思考実験の形で提出されている (cf. Putnam (1975), pp. 223ff.). 宇宙の遥かかなたにこの地球のほとんど完全なコピーであるような天体(「双子地球」)が存在するとしよう。地球と双子地球との唯一の違い⁽¹¹⁾は、後者の川や湖を満たしているのが水ではなく、観察可能な性質においては水とまったく区別できないが化学的構造においては異なるXYZという物質だということである。誤解の余地がないように、話を水やその他の物質の化学的構造が知られる以前の1750年のこととしよう。この時点において、この地球上の日本語の「水」という語はどの物質を指し、他方、双子地球上の日本語の「水」という語はどのような外延をもっていたと言うべきであろうか。パットナムの直観では、今日と同じようにその時点においても前者はH₂Oを、後者はXYZを外延としてもっていたと言うべきである。しかし、1750年の時点においては、それぞれの物質について(あるいはそれぞれの日本語の「水」に対して)それぞれの日本語社会の人々が心の中で結びつけていた概念は、つまり各々の「水」という語の内包は(仮定により)質的にまったく同じであろう。それゆえ、少なくともある種の語の外延(ないし充足条件)は、その内包、つまりその語と結びつけられている概念的内容(サールの言葉で言えば、志向的内容)によっては決定されえない、とパットナムは結論する。

以上の議論に対して、サールはパットナムの言語直観の正しさを仮定した

うえで次のように論じる (cf. pp.202ff.)。確かに、語ないしその外延である対象 (のクラス) と結びつけられるのが一般的概念 (「水」の場合なら「液体である」「無味無臭である」等の概念) であると限定するならば、パットナムの議論は有効であろう。しかし、このような限定を付すべき理由はない。現にパットナム自身が、「水」のような自然種名の外延は次のように指標的に indexically 決定されると考えている。すなわち、「水」という名の各命名者が (H_2O なり XYZ なりと知覚的に遭遇して)、「水とは、この物質と同じ構造 (その構造がどのようなものであれ) をもつものである」と考える、ないし発話すること (と、続いて生じるべき伝達の過程と) によって、「水」の外延が決定されるというように考えている。しかし、この「この物質と同じ構造をもつもの」という「水」の外延の指標的特徴づけは、確かに命名に際しての命名者の志向的内容 (の一部) を成していると言えるのではなからうか。つまりパットナムは、一般的概念の束としての志向的内容という伝統的見解の代わりに、指標的概念から成る志向的内容という新しいアイデアを置き換えただけではなからうか。

しかしもちろん、決定的に重要な問題は、このような指標的な志向的内容が (引き続き上の例に即して言うならば) 各々の「水」の外延 (充足条件) を決定すると、サールが望むように言えるか否かである。サールは、(この例の場合「この」という) 指標詞 indexical の指示の仕方を明らかにすることによって、そう言えることが明白に示されると考える (cf. pp.220ff.)。彼によれば、「私」「あなた」「今」「ここ」等々の) 指標詞はその意味的要素として、第一に「自己指示性」という要素、つまり当の指標詞のそのつどの発話 (トークン) へのある仕方での言及を含むという性質を有する。第二の要素は、そのつどの発話を指標詞のそのつどの指示対象へと結びつける関係を表す。われわれの例に現れる「この」といった指標詞の場合には、この関係が一定ではなく、そのつどの発話のコンテキストのあり方に関する意識 (指標詞の第三の意味的要素) が補われることによってはじめて決定されると考えなければならない。

指標詞の指示に関する以上のような理論に従うならば、問題の「この物質と (どのような構造であれ) 同じ構造をもつもの」という発話が表す志向的内容は、より詳しく正確に表現するならば、

(b) この発話と関係 R に立っている物質と (どのような構造であれ) 同じ構造をもつもの

となるとサールは言う。各々の命名者がそれぞれの物質と知覚的に接しているという事情を考慮するならば、関係Rはこの場合「の主体が知覚している」という関係であると解するのが妥当であろう。しかし、このように指標詞を含む発話の表す志向的内容が（知覚経験の志向的内容と類似の仕方）自己指示的であることによって、次のことが示されるとサールは主張する。すなわち、言語的には等しく(b)として表現される志向的内容は、地球上の命名者においては明らかに彼の発話自体へのある仕方での言及を行い、他方、双子地球上の命名者においては明らかに彼の発話自体へのある仕方での言及を行うのであるから、各々が命名に際してもつ志向的状态の志向的内容そのものが互いに異なるということである。そしてそうだとすれば、明らかに前者の志向的内容が決定する充足条件に適合する fit、あるいはそれを満たす meet のは（仮定により） H_2O のみであり、後者の志向的内容が決定する充足条件に適合するのは XYZ のみである（cf. pp.205-6）。サールはこのようにして、心に内在する志向的内容による外延（充足条件）の十全な決定という内在主義の主張の正しさを示すことができ、したがってパットナムによる論駁の試みは失敗に終わっていると判定するのである（cf. pp.206ff; pp. 62ff.）。

はたしてサールの判定は正しいと言えるのであろうか。少なくとも二つの大きな疑問が、彼による知覚経験の志向的内容の分析と、（知覚経験を含め）いくつかの種類志向的状态に関して彼が認めた志向的内容の自己指示性という性質をめぐって生じてくると考えられる。（前者と同様の疑問は行為の志向性の分析に関しても当然生じるが、すでに述べたように本稿ではこの点は扱わない。）これら二つの疑問点について、以下の節で順次検討を加えてゆくことにしたい。

4. 知覚経験の志向的内容をめぐって

サールの知覚理論を独自のものにしてしているのは、言うまでもなく、知覚対象がしかるべき仕方知覚経験を引き起こす原因となっていることを知覚の成立の必要条件としてはっきりと認めただけで、さらにこの因果的条件を知覚経験の志向的内容のうちにいわば内在化させていることである。しかしサールの知覚理論のまさにこの独自の点に関して、ただちに一つの疑問が生じる。なぜ知覚成立のための因果的条件が知覚経験の志向的内容そのもののうちに含まれなければならないのであろうか。このような疑問が生じるのは、も

もちろん、われわれが一つの前提に立つからである。すなわち、知覚経験の志向的内容は、この経験に際しての知覚者の第一人称的視点を表すものであり、したがって知覚者によってある意味で明白に捉えられているものでなければならない、ということである。ある対象知覚に際して、その対象がまさにそのとき生じている知覚経験の原因であることをわれわれ自身が明白に捉えていると言えるかどうか、内省的には少なくとも明らかではない。それゆえ上の前提に立てば、なぜ知覚の因果的条件が知覚経験の志向的内容に含められるのかという疑問が生じるのは当然である。だがサール自身、上の前提を共有しているように思われる (cf. p.65; p.92)。では、なぜ彼はあえて知覚経験の志向的内容を上のような仕方と同定するのであろうか。

このような疑問をさらに強化するのは、幼児や高等動物も知覚する (と考えられる) という事実である。この事実はサールも認めている (cf. p.5)。しかし幼児や高等動物は、彼らの知覚において自分の知覚経験が知覚対象によって引き起こされていることを捉えていると言えるであろうか。そう言うためには、幼児や高等動物に「原因」や「自分の知覚経験」という概念が備わっていると考えるべきではないように思われる。だが、そう考えることに無理はないであろうか。

以上のような考え方に沿って、多くの論者がサールによる知覚経験の志向的内容の定式化に対して疑義を呈している⁽¹²⁾。これらの疑義に対して十分に答えることがサールにとっては必須の事柄であることは、彼の内在主義の立場からすれば明白である。繰り返しになるが内在主義とは、志向的状态 (今の場合、知覚経験) の志向的内容が (ネットワークおよびバックグラウンドとともに) その充足条件を十全に決定するという立場である。したがって知覚経験が充足される、つまり本物 veridical の経験であるための因果的必要条件は、内在主義の立場からすれば、是非とも知覚経験の志向的内容そのもののうちに組み込まれていなければならないのである。(もちろん問題の因果的条件はネットワークまたはバックグラウンドに属するとみなす逃げ道は、サールに残されている。この点については後述する。)

さて知覚経験の志向的内容をめぐる行われた批判に対するサールの解答の要点は、(少し長くなるが) 以下の引用文に含まれていると考えられる。

…その F が G であることを私が見るとすれば、その際の表象 representation は次のようなものである。すなわち、
 視覚経験 (その F は G であり、かつその F が G であることがこ

の視覚経験を引き起こしている) [以下(c)とする—引用者による注記。以下同様。]

おそらく、私の本 [すなわち『志向性』のこと] の主張のなかでこの主張ほど誤解されたものはない…標準的な反論は、それ [(c)] が「複雑すぎるないしは洗練されすぎている」(Burge (1991), p.198) …というものである。しかし、この反論は誤解に基づいている。私は、知覚者自身が [(c)の] 括弧内の文を [そのとおりに] 心のなかで言語的に思考するのだとか、あるいは知覚者がそもそもこれらの [充足] 条件をこのように分節化された形で意識するということさえ主張してはいない。理論的表象 [(c)のこと] は、第一階 first-order の心理的諸事実に関する、第二階 second-order の特徴づけにはほかならない。私は、非言語的な視覚的現象の内容を、言語を用いて特定しようとしているのである。それゆえ、複雑さは理論的表象の問題であって、第一階の心理的事実の問題ではないのである。第一階の事実はまったく単純である。…しかし志向性の理論においてわれわれは、実際の内容に含まれてはいるが、知覚主体には直接利用可能ではないかもしれない複雑な要素を見出すのである。(Lepore & Van Gulick(1991), p.228.)

サールの答弁のポイントは二つあると考えられる。第一の論点は、サールが知覚経験の志向的内容を(c) (あるいは第二節の(a)) のような仕方で特定するとき、彼は決して、当の知覚経験に伴って、「この知覚経験は知覚対象によって引き起こされている」というような自己反省的 (サールの言葉では「第二階の」) 思考ないし意識が知覚者のなかに生じると主張しているわけではない、ということである。第二の論点は、(c)のような思考的内容の表現方式は洗練された理論的探求の所産であり、したがってそこには知覚者本人には認知的に接近不可能な概念が含まれる、ということである。

第一の論点に関しては、確かにサールの批判者の議論には、彼が指摘するような誤解が含まれていると言えるかもしれない。たとえばアームストロングは、「単なる知覚」と、知覚とその知覚についての反省的意識とのいわば複合体としての「知覚的経験」との区別を示唆したうえで、「しかし、われわれが加えて知覚の意識をももつ (通常、人間はこの意識をもつわけだが) 場合には、この意識の志向的内容は、知覚が外的事態によって引き起こされたものであることを含む」と述べている (ibid., pp.154-5)。しかし、たとえばこのように批判者の側に誤解があったとしても、この節の最初に指摘した

ような問題点がサールによる知覚経験の分析から消えるわけではない。つまり問題は、文字どおりに(c)のような仕方では知覚者自身が特定するであろう反省的意識が知覚経験とともに生じているかどうかではない。そうではなくて、まさに「第一階の心理的事実」のレベルにおいて、(c)の括弧内の後半の条件に何らかの意味で対応するような内容が、知覚者本人の第一人称的視点のうちに含まれているか否かが問題なのである。

第二の論点は実は主としてバージからの反論を念頭において提出されている。バージはサールの(c)を次のように理解したものと解される。すなわち、(c)の後半の条件には、ある指示項（つまり視覚経験そのもの）への指示（「この視覚経験」）が含まれており、しかもこの指示項がどのような仕方でもその指示対象（与えられたFがGであるという事態）を指示するかに関する分析ないし説明（いわゆる因果的説明）も含まれている、と理解したのである（cf. *ibid.*, pp.197-8）。このように理解すれば、(c)は明らかに「指示」とか「指示のメカニズム」というような「第二階の」概念を含むことになり、通常の知覚者が知覚に際して常にこのような概念を意識しているとはとても考えられない、ということになる。しかし、バージのような理解は、サールの(c)の明らかな曲解である（この曲解は第一の論点に関わる誤解をも含むかもしれない）。普通に読むならば、(c)の後半の条件はまさに「知覚対象が当の知覚経験の原因であること」を述べているだけであり、そこには「指示」といった第二階の概念は現れてはいない。

言い換えれば、上の第二の論点は、サールがバージの曲解を曲解とはっきり認識しなかったために提出されてしまった無用の議論であると考えられる（cf. *ibid.*, pp.230-2）。もちろん、ある視覚経験の志向的内容を(c)として特定する理論家は、その際に視覚経験そのものや因果関係への指示を行わなければならない、つまり「指示」の概念をある意味で使用しないし動員しなければならない。しかし、このことはその特定自体のうちに「指示」の概念が現れる、あるいは含まれるということとはちがうのである。しかも、もし(c)による志向的内容の特定が正しいとすれば、知覚者自身が視覚経験をもつことにおいて視覚経験そのものや因果関係へのある仕方での指示を行っていないなければならない、と考えられる。結局のところ、志向性の理論は、知覚経験の志向的内容をそのまま、ただしかし明確に分節化して取り出すことをめざすものであり、もともとそこに含まれていなかった要素を付け加えるようなことがあれば、それは誤った理論だということになる。サール自身、上の第

二の論点を提出しながらも、われわれの知覚経験は「その志向的对象によって引き起こされたものとしてわれわれに経験される」(ibid., p.184)という元来の主張を決して譲ってはいない。

しかし本節冒頭で提示した疑問は、なぜ知覚経験が常にそのようなものとして経験されると言われるのか、という疑問であった。この点から見れば、アームストロングやバージとサールとの間の論争は、実り豊かであったとは言い難い。サールは結局、知覚経験の志向的内容になぜ因果的条件が含まれなければならないのか、その十分な根拠を自分が示してはいないことをあっさり認め (ibid., p.236)。そして、この点について論証はできないが、自分の見解の方へと傾かせるような議論を示すことはできると言う。そこで彼が示すのは、「鋭利な物体が私の背中に押しつけられる」という触覚的経験の例である。なるほど、この例では触覚的経験が「その志向的对象によって引き起こされたものとして経験される」と言うことは自然であるかもしれない。しかし逆に言えば、このように言うことが自然ではない他のケースがあると考えられるわけで、サールの議論はさほど説得的であるとは言えないであろう。

いずれにせよ、われわれにとって重要なことは、知覚経験がどれだけの志向的内容を含むか、というこの問題自体に適切な解答を与えることよりも、むしろこの問題とサールの内在主義との本質的関連をもう一度明確に確認することである。一つには、サールの(c)が知覚経験の志向的内容の適切な分析であるとすれば、この志向的内容の自己指示性とはどのような性質であるのか、そしてこの性質によって内在主義の保証が得られるのかどうかを明らかにする必要がある。これは次節の課題である。今一つの問題は、仮にサールが知覚経験の志向的内容に因果的条件は含まれないと認めたとすれば、彼の内在主義の立場は維持されうるだろうか、という問題がある(本節95頁参照)。この点を本節の最後に論じておきたい。

仮に知覚経験の志向的内容のうちに因果的条件が含まれないとすれば、サールの内在主義の立場からすれば、この条件はネットワークまたはバックグラウンドのなかに含まれていることになる。なぜならこの立場では、知覚経験(であれその他の志向的状态であれ)の充足条件は心の内在的要素によって十全に決定されるはずだからである。さて第二節の事例に戻って考えることにすると、今の場合知覚経験の志向的内容は、

(a')知覚経験(目の前に黄色いステーションワゴンがある)

といった仕方で表されることになるだろう。しかし、仮に（サールの立場ではありえないことだが）知覚者がこのステーションワゴンについて抱く志向的状态が、（a'）として表される知覚経験だけであるとしよう。そうだとすると、この知覚者とその双子地球上の分身とがそれぞれの目の前にあるステーションワゴンについてもつ志向的内容には何の違もないことになるだろう。それにもかかわらず二人のもつ志向的内容は別々のステーションワゴンによってのみ充足されるのだから、志向的内容が充足条件を決定しないことになり、内在主義は崩れるであろう。したがって、二人は各々のステーションワゴンに関して質的には区別されないが、内容を異にするような別の志向的状态を同時にもっていなければならぬことになる。つまり、たとえば

(d)信念（この知覚経験の原因はそれの知覚対象である）

と表されるような志向的状态をもっていなければならぬであろう。このような状態は、最初に確認したように、各々の知覚者のネットワークないしバックグラウンドの協働によって何らかの仕方で実現されるはずのものである。しかし（d）のような志向的状态は、元の知覚経験についての、今度は正真正銘の「第二階の」意識、つまり正真正銘の反省的意識である。知覚経験に伴って常にこのような反省的意識が生じていなければならぬと考えることは、言うまでもなく「複雑すぎるないしは洗練されすぎている」であろう。それゆえ因果的条件を個々の知覚経験の志向的内容そのものではなく、ネットワークまたはバックグラウンドに属させることは、サールにとって決して得策であるとは考えられないのである。

5. 志向的内容の自己指示性をめぐって

知覚経験の、あるいは指標詞を含む発話の志向的内容の自己指示性という性質は、第三節で確認したとおり、サールによる内在主義の主張をそもそも可能にしている重要な性質である。したがって当然、このような志向的内容の自己指示というものがどのように行われるか、より詳しく言えば、それは内在主義と両立可能な仕方で、つまり志向的内容が指示（充足条件）を十全に決定するという仕で行われうるものなのかということが、重大な問題になってくると考えられる⁽¹³⁾。

しかしサール自身はこの問題の重大性をただちに認めようとはしていないように見える。この点に関して彼は次のように述べている。

視覚的な志向的内容が自己指示的であるということの意味は、それがそ

れ自身についての言語的ないしその他の表象を含むということではない。それは明らかに自己指示という言語行為を行ってはいない。むしろ、視覚経験が自己指示的であるということの意味は単にそれ自身の充足条件のなかにそれが現れるということである。このことを視覚経験は語るsayのではなく、示すshowのである。(p.49.)

あるいは、

視覚経験の自己指示性は示されるのであって見られるのではない。指標的発話の自己指示性は示されるのであって述べられるのではない。

(p.223; cf. Lepore & Van Gulick (1991), p.228.)

あたかも、知覚経験をもつことにおいて、あるいは指標的発話をなす際に主体がこれらの経験あるいは発話への指示行為を行うわけではない(このことは明らかである)がゆえに、これらの志向的状态の自己指示性がどのように働くかは大した問題ではないと、サールは言っているかのごとくである。

しかし、もしサールがそのように考えているのだとすれば、それは誤りであろう。これらの志向的状态において(ましてやそれらに伴って)それらに対するいかなる意図的な指示行為も、知覚ないし発話の主体によって行われるとはかぎらないことは確かである。しかしそれにもかかわらず、それは何らか別の仕方でも常に自己自身を指示すると、サール自身が述べているのである。したがって、これらの志向的状态の自己指示性がともかく志向性の現象の一種であることを、彼は認めざるをえないであろうと考えられる。したがってまた、それらがいったいどのような仕方でも自己自身を指示するのか、この自己指示は志向的内容がそれ自体で指示対象(充足条件)を決定するという仕方で行われるのかということも、サールにとって重要な問題であらざるをえないであろう。上の引用文に含まれているポイントは、問題となる志向的状态の自己指示においては、当の志向的状态が(対象の表象であると同時に)まさに自己自身の表象ともなるのであって、それ以外に別の志向的状态が必要とされるわけではない、という点に尽きる(つまり自己指示のなされ方に関する問題からサールを免罪するわけではない)と考えられる。

この自己指示の問題が、双子地球の物語に基づく批判に対する反論において用いられた方法(第三節参照)によっては解決不可能であることは明白である。それは明らかに循環ないしは無限廻行に陥るだろうからである⁹⁶。私見では、この問題に関連するサールの論述のなかで最も明確なものは、次のような指標的発話に関する論述である(cf. pp.223f.)。たとえば「私は今

腹がへっている」という発話の場合、その充足条件は次のように表される。

(e) 「私」というこの発話を行う人物は、「今」というこの発話の時点において腹がへっている。

しかしサールによれば、上述のとおり、この発話者の志向的内容には問題の発話への「この発話」という仕方での独立の指示が含まれているわけではない。そうではなく、このような（自己）指示性は発話が「示唆する indicate」ものにすぎない。したがって発話者の志向的内容は、この（自己）指示性を示唆する人為的記号（たとえば「*」）を導入することによって、より忠実に表現できるであろう。すなわち、

(e') *を行う人物は*と同じ時点において腹がへっている⁽¹⁵⁾

というようにである。サールは以上のように述べている。

このような論述から考えるならば、指標的発話における「*」が表す自己指示性はどのように働くことになるであろうか。ここにはもはや指示されるべき対象についての、つまりその対象をそれ自体で特定するような志向的内容がないことは明らかであると思われる。むしろこの自己指示は、当の発話が行われるという、志向的内容 ((e')) にとっては外的な事実によって成立すると言ふべきであろう（同様のことは知覚経験の自己指示性についても言えるであろう）。これは言うまでもなく、サールの内在主義が特定の志向的状态の自己指示性に関しては維持されないことを意味する。なぜなら、これらの志向的状态による自己指示という志向性においては、その充足条件をそれ自体で十全に決定すべき志向的内容（あるいはネットワークやバックグラウンド）⁽¹⁶⁾が存在しないことになるからである。

他方、指標的発話についての上のような論述はサールの真意ではない、つまり彼はあくまでも指標的発話や知覚経験の自己指示もまた何らかの志向的内容の充足という仕方で行われると考えているのだとしよう（cf. Lepore & Van Gulick (1991), p.240）。（この場合ただちに、それは実は自己指示ではなく、これらの志向的状态とは別の表象による独立の指示ではないかという疑いが生じるであろう。しかし、この点は議論のために無視することにする。）それでは、このような自己指示はどのような志向的内容によって生じうるのであろうか。この志向的内容を、再び志向的状态の自己指示性というアイデアに従って特定することが不可能なことは、先に確認したとおりである。だが、このアイデアが用いられないとすれば、それ以外の必要な方策をサールはもちろん示してはいないし、またそれを見出すのは容易なことではないと思われ

る⁽¹⁷⁾。そこから帰結するのは、たとえば各々H₂OとXYZを目の前にして「水」と命名しようとしている、地球上の命名者とその双子地球上の分身がそのときもつ志向的内容には差異はない、という帰結である。

以上の検討によって、サールの内在主義がそれを支える要であったはずの、指標的発話や知覚経験の自己指示性という、まさにそのアイデアに関して致命的な限界を露呈しているという結論の避け難いことが示されたと考える。このことは何を意味するであろうか。言うまでもなく、われわれの志向的状态（表象）が現実の世界のどの事態「に向けられている」のかは、われわれの一人称的視点を表す志向的内容が決定する充足条件の充足という仕方では、必ずしも決まらないということである。このような仕方それが決まらない場合には、世界の非志向的事実（特に因果的事実）を考慮に入れなければならない（言い換えれば、志向的内容の理論と充足条件の理論とは区別されるべきではないか、ということである）。では、非志向的事実は志向性の現象とどのように関連し合っているのか。ごく大ざっぱに言えば、主体の志向的内容がどのような因果的経緯を経て獲得されたものであるのかということが、志向的状态と世界との関係を決める上で本質的な重要性をもつのではないかと思われる（cf. Evans (1977), p.204）。しかし、この点について詳論することは、むろん本稿の課題には属さない。

他方、サールの内在主義の挫折は、決して志向的現象に対する彼の基本的なアプローチの挫折を意味するものではない。このアプローチは、志向的現象をその（一人称的）志向的内容によって同定し、このように同定された志向的現象を非志向的現象に還元不可能なものとして取り扱うというものである。上述のように、個々の志向的現象と世界との関わりはある種の非志向的事実によって支えられていると考えられる。しかし、このことが志向的現象一般の非志向的事実への還元を不可避にするわけではないことは明らかであろう。一方、サールの非還元主義的アプローチを、本稿の最初に述べた物理一元論的世界観のうちどのように取り込むべきなのか、という興味深い問題があるが、これについての議論も別の機会を期さなければならない。

註

- (1) 言語行為論については、Searle (1969) および (1979) を、その後の発展については、Searle (1980a), (1980b), (1980c) を参照。

- (2) 以下、特に断らないかぎり、本文と註における () 内に示す参照頁・章節は、Searle (1983) のものである。
- (3) このテーゼは、Searle (1992) においてさらに詳しい議論を通じて擁護されている。
- (4) サールによるこのテーゼ的印象的な述べ方は、「桶の中の脳」(cf. Putnam (1981), ch.1) でさえ志向性を有する、というものである (cf. e.g., p.154)。
- (5) このテーゼは、Searle (1984) においてより詳しく展開されている。
- (6) 適合方向、したがって充足条件をもたないとされるのは、たとえば「遺憾の念」とか「喜び」といった志向的状态である。これらは一定の信念や欲求などを前提としてはいるが、しかししかるべき世界の事態によって充足されたりされなかったりするわけではない。
- (7) より正確には、問題の志向的状态の志向的内容と、その背景として存在する「ネットワークNetwork」および「バックグラウンドBackground」とによって決定される、と考えられている。以下の註(9)を参照。
- (8) 色、形、音、固さといったいわゆる可感的性質は、サールの知覚分析では、知覚の「志向的对象」つまり現実の対象の属性とみなされるので、ここで言われる「現象的性質」ではない。では「現象的性質」とはどのような性質であるのか。『志向性』には、この点についての詳しい論及はなく問題を残している。
- (9) もう一つ忘れてはならないのは、サールが志向的状态に関する「全体論holism」の立場をとっていることである (cf. pp.19f. et passim)。たとえばある人が同一の対象を見ても、それが「本物の家である」という信念をもつ場合と、「単なる映画のセットの書き割りである」という信念をもつ場合とでは、視覚的経験の志向的内容そのものが異なるであろう。このように、ある一つの志向的状态の志向的内容は、別のいくつかの志向的状态(「ネットワーク」との関連においてのみ、さらには非志向的な心の諸能力(「バックグラウンド」)を背景としてのみ十全に決定される、と考えられている (cf. ch.5)。
- (10) 『志向性』の第八、および第九章を参照。そこで議論の対象とされているのは、パットナムの議論以外に、T. バージやクワインが論じた「言表に関連する信念 *belief de dicto*」と「事物に関する信念 *belief de re*」の区別 (cf. Burge (1977); Quine (1966))、D. カプランやJ. ペリーが展開した指標詞の直接指示説 *direct reference theory* (cf. Perry (1977), (1979); Kaplan (1977))、さらにはクリプキやドネランによる固有名の指示に関する因果説 (cf. Kripke (1980); Donnellan (1974)) である。

- (11) しかし水の化合物についてはどうであろうか。車を運転するときは、双子地球上においては H_2O の代わりにXYZが排出されるのでであろうか。では、双子地球の化学は地球のそれと根本的に異なることになるのではなかろうか。このような疑問をサールは提出している (cf. p.203)。
- (12) これらの批判のうち本稿においては、Lepore & Van Gulick (1991) に収められている、アームストロング、バージ、およびマクダウエルの論稿にのみ言及することにする。彼らのなかで本節の問題について最も詳しく論じているのはバージである。
- (13) この問題を最も明確に指摘しているのはマクダウエルである (cf. McDowell (1991), pp.217f.). しかしマクダウエル自身の見解は、ある種の「事物に関する信念」の存在を認めるものである。したがってサール流の内在主義を否定する点においては本稿と軌を一にするので、彼の見解の詳細には立ち入らないことにする (註 (17) 参照)。
- (14) たとえば第三節の(b)における「この発話」の表す志向的内容が、問題の方法によって特定されたとしよう。そうすると「この」に含まれる内容は「この発話と関係 R に立つ」というようになるであろう (もちろん「R」の最もありそうな候補は「と同一の」という関係である)。しかし、このような特定が、もともとわれわれが直面していたのと同じ問題を引き起こすことは明白である。
- (15) 同様の表記法により、第二節の(a)のような知覚経験の志向的内容は、
(a'') 視覚経験 (目の前に黄色いステーションワゴンがあり、かつそれは
*の原因であるステーションワゴンである)
のように表されるであろう。
- (16) そもそも志向的内容がないところには、それを補うべきネットワークもバックグラウンドも存在しないであろう。
- (17) マクダウエルは「対象自体の心への現前 presence」が対象特定の一つの仕方 (つまり一つの志向的内容) でありうると主張する (Lepore & Van Gulick (1991), pp.217-8)。しかしサールが正しく拒否しているように (cf. *ibid.*, pp. 238ff.) このような志向的内容は彼のアプローチとは相容れない。サールの意味での志向的内容は、あくまでも対象の存在とは独立に対象を特定するものでなければならないのである。

参考文献

Almog, J. & H. Wettstein (eds.) (1989) : *Themes from Kaplan*, Oxford

University Press.

Armstrong, D. (1991) : "Intentionality, Perception, and Causality: Reflections on John Searle's *Intentionality*", in Lepore & Van Gulick (1991), pp. 149–58.

Burge, T. (1977) : "Belief *de re*", *Journal of Philosophy*, vol.74, pp.338–62.
 ——— (1991) : "Vision and Intentional Content", in Lepore & Van Gulick (1991), pp.195–213.

Donnellan, K. (1974) : "Speaking of Nothing", *Philosophical Review*, vol.83, pp.3–32; reprinted in S. Schwartz (ed.) : *Naming, Necessity, and Natural Kinds*, Cornell University Press, 1977, pp.216–44.

Evans, G. (1977) : "The Causal Theory of Names", in S. Schwartz (ed.) (1977), pp.192–215.; first published in *Aristotelian Society Supplementary Volume 97*, 1973, pp.187–208.

Kaplan, D. (1977) : "Demonstratives", mimeo, UCLA; printed in Almog & Wettstein (1989), pp.481–563.

Kripke, S. (1980) : *Naming and Necessity*, Harvard University Press: first published in G. Harman & D. Davidson (eds.), *Semantics of Natural Language*, Reidel, 1972, pp.253–355.

McDowell, J. (1991) : "Intentionality *De Re*", in Lepore & Van Gulick (1991), pp.215–25.

Perry, J. (1977) : "Frege on Demonstratives", *Philosophical Review*, vol.86, pp.474–97.

——— (1979) : "The Problem of the Essential Indexical", *Nous*, vol.13, pp. 3–21.

Putnam, H. (1975) : "The Meaning of Meaning", in *Mind, Language and Reality. Philosophical papers*, vol.2, Cambridge University Press, pp.215–71; first published in K. Gunderson (ed.), *Language, Mind and Knowledge*, Minnesota Studies in the Philosophy of Science, vol.7, 1975.

——— (1981) : *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press.

Quine, W. V. (1966) : "Quantifiers and Propositional Attitudes", in his *Ways of Paradox*, Random House, pp.183–94.

Searl, J. (1969) : *Speech Acts. An essay in the philosophy of language*, Cambridge University Press.

- (1979) : *Expression and Meaning. Studies in the theory of speech acts*, Cambridge University Press.
- (1980a) : "Minds, Brains and Programs", *Behavioral and Brain Science*, vol.3, pp.417-24.
- (1980b) : "Intrinsic Intentionality", same issue as (1980a), pp. 450-6.
- (1980c) : "Analytic Philosophy and Mental Phenomena", *Midwest Studies in Philosophy*, vol.5, pp.405-23.
- (1983) : *Intentionality. An essay in the philosophy of mind*, Cambridge University Press.
- (1984) : *Minds, Brains and Science*, Harvard University Press.
- (1992) : *The Rediscovery of the Mind*, MIT Press.